

設立10周年記念

10年目のフォーラム：イギリスの教育
—故ブライアン・ホームズ先生との対話—
鈴木慎一

—

ブライアン・ホームズ先生は、私がロンドン大学に遊学した折の先生である。1971年当時のことであるから、昔々のことになった。その頃、ホームズ先生はリーダー（reader）という地位にあって、教育年報（Year Book of Education）の編集から専門雑誌の編集などで多忙であった。60年代の比較教育学を代表する一つの著作の著者であること、比較教育の方法論を正面切って取り上げた人であること、その著作のなかで日本の道徳教育を取り扱っておられたけれども、幾つかの記述について疑問を持っていたことなどが、私がホームズ先生の所へ赴いた理由であった。

ロンドン大学セネットハウスの左翼に先生の部屋があって、大型のエレベーターを使って階上へ登り、白熱灯の灯る薄暗い廊下をいくと、左側に先生の部屋があった。テーブルの上には、厚紙のマットが敷いてあって、そこには先生が折に触れて書き記した漫画風のキャラクターから記号から数式・数字まで、いろいろと描き鏤められている。正面には、世界各地から送られてきたクリスマスカードが沢山貼りつけられている。思いもかけず子どもっぽい机まわりの風情に意外な気持ちになった。後に判ることだが、私と丁度一回り年が違ふホームズ先生は、間もなく50歳になるうとしているときに、そのような部屋で初対面の私に研究計画について質問をしてくださったのである。パートナーシップとコンプリヘンシヴスクールについて調べたいという私の返答を聴くや否や、1944年教育法の枠組のもとで、その主題がどのように一般化されるか、比較するとすれば日本の教育法の何と対比しうるかと、矢継ぎ早な質問が先生の口を衝いて出た。あまり聞き取りやすい語り口ではない先生の質問に初めて出会ったときのことである。

そのお部屋を、滞在期間中は勿論、その後度々訪れた。日本から何方かが訪れている時間にそれが重なったり、約束を忘れておられたり、丁度昼食だからと教員食堂へ案内して下さったり、いろいろな場面を思い出すことができる。しかし、1984年に世界比較教育学会（コミッション）で方法論を扱う部会が設けられるまで、私がホームズ先生と“先生の方法論”について踏み込んで細かな話をした覚はないから、比較教育の方法論という点については、滞在中はもっぱら1950年代から始まる論争の経緯を、比較教育とは何か、何をすべき学問であるか等の、学の基本を巡る諸説の流れを調べていて、それらについて折々先生の話聞いていたということになる。

ロンドン大学を定年で退かれる少し前に、ホームズ先生を日本へお招きした。日本学術振興会のご好意で、早稲田大学に1987年から翌88年まで半年ほど滞在された。その間、文部省に臨時教育審議会の経過と方策について聴きにいらっしやったり、各地の大学を訪問されたり、当時まだ始まっ

議会の経過と方策について聴きにいらっしやったり、各地の大学を訪問されたり、当時まだ始まったばかりの学校へのコンピューター導入を視察されたりと、忙しく過ごされた。滞在期間中に残された種々のノートが私の手許にあり、デーヴィッド・ターナーさんと編集するホームズ著作集に入れられるはずである。日本に滞在中、奥様とお嬢様が東京にやっこられた。そうした方々を含めて、先生との対話のなかで、しばしば日本の文化について説明しなければならなかったことを思い出す。

先生は日本酒がお好きであった。それも屋台や赤提灯で飲む酒が好みであった。若い頃博多に住み、故人平塚益徳博士との共同研究に従事した頃からの好みである。ある一日、木田宏氏から自宅へ招ぜられたことがある。お相伴で私もお供した。約束の時間よりも早めに目指す駅に着いてしまった先生と私は、時節が寒い折であったこともあって、駅前の一杯飲み屋へ腰を落ち着けた。一合が二合になり、二合が三合になり、木田宅へ赴いたときには、二人ともいくらかできあがっていた。申し訳ないことであったが、そのせいか、ホームズ先生と木田博士との会話は大変に弾み、博士がご所蔵の壺を巡る侘び寂びのお二人のやり取りは、通訳を兼ねた私にとっても楽しいものであった。そのような夕べ、食後の団欒に木田博士のお孫さんが弾くピアノのメロディーに合わせて、先生は身を揺すられておられた。何か口ずさんでおられたが、そのようなホームズ先生を見たことはそれ以前にもその後にもない。

1988年の春は早く帰国されてから後、1989年（モントリオール）の世界比較教育学会（WCCES）に際して先生は比較研究の在り方を問いなおすセミナーを組織された。そのセミナーに呼ばれ、堀尾輝久さんと一緒に参加したことから、思いもかけず私自身が1993年に早稲田でシンポジウムを組織することになった。教育とわれわれが呼ぶ現象の底に沈む深層信念体系の比較分析が先生の目指す比較教育研究であった。そのテーマ設定について、私がノートを整えてロンドンに持参したとき、新しく建てられたインスティテュートの一室でそれを一読され、このような研究こそ自分の意図する研究であるとおっしゃられた。私にとっては嬉しい一言であったが、それはまたなかなか困難な作業で、今日になってもまだ完成していない。そのようにして始まった共同研究で、私はゾーヤ・マルコーワ（ロシア）、カドリヤ・サリーモワ（ロシア）、ジェラルド・リード（アメリカ）、ヴォルフガング・ミッター（ドイツ）、エドムント・キング（イギリス）、レ・タン・コーイ（ヴェトナム、フランス）という人々と知り合い語り合うことになり、それらの人々を介して、私の交友範囲が更に広がったことをおもうと、一人の師に出会うことの大事さに改めて思い至る。

私はこのようにしてご一緒に仕事をする機会に恵まれたが、先生は心臓疾患がもとで、1993年の7月に他界された。享年72歳であった。

二

日英教育研究フォーラムが発足後10年を経る。10年を振り返る時、それに先立つ幾年かのことがやはり想い起こされる。ホームズ先生のことを記すのも、そのようなことの一つである。

ホームズ先生の滞在中に、フォーラムのいわば前身（の一つ）であったイギリス教育研究会の方々

が、ホームズ先生と歓談されたことがあった。今はもうなくなってしまった旧大隈会館（早稲田大学）の二階の和室が会場であった。大田堯先生、鈴木英一先生、神田修先生、小澤周三先生、その他のいつもの顔ぶれがホームズ先生を囲んだ。

折から、日本では臨時教育審議会が報告書を公にしたところであり、片やイギリスでは、1988年教育改革法の元になった法案が議論されるという状況で、特に、法案に関連するコンサルテーションペーパーがイギリス政府から多数出され、しかも、夏休みを挟む短期間のうちに関係者が見解を求められたという状況については、それまでのイギリスの取り組み方とは異なるという印象を日本側の者が受けていたという事情もあったから、この会合では、ホームズ先生から聞くことに期待するところがそれぞれにあったのではなからうか。

対話は、しかしながら、多くの日本側参加者が期待乃至予想したものと違った雰囲気の中で行われたように思う。まず、ホームズ先生は議会の議論がイギリスの大衆の議論であると考えていて、ナショナルカリキュラムの導入についても肯定的であった。このことは、後にリチャード・ティース博士（ケンブリッジ）やエドムント・キング博士（ロンドン）についても同様の対応を見ることになったが、その当時私にとっては稍意外であった。日本側の少なからぬ人々（といっても、出席者は十名に満たないが）にとっては、学習指導要領の持つ制限的な枠組みが日本では問題であると思われていたから、ナショナルカリキュラム以前の英国型教育内容行政はむしろ望ましい行政の在り方としてその目には映っていた。教科書検定制度も極めて問題が多いと考えていたから、検定制度的ない英国の制度装置が優れていると評価していた。全国学力調査が行われた結果、どのようなことが日本の学校で起こっていたかを知っていたから、そしてまた、「出来高払い制度」（payment by result）がイギリスの学校教育に齎した事を多少とも学んでいたから、イギリス型到達度評価の新方式には懐疑的であった。学校理事会（学校評議員会）の強化と親代表性の重要視は原理的にそれらの意味を知悉しつつ、テイラー報告書の提案が行政的に換骨奪胎されたことを知っていたものにとっては、サッチャー政権下で改めて提案される方策のその意図をむしろ“極めて政治的なもの”であると考えていた。教師の自由は失われるのではないかと危惧感を抱いていた。ホームズ先生の答え方は、そういう疑問や評価に対して、トピックスによって程度の差こそあれ、稍、そしてある場合は極めて対蹠的であったと記憶している。

ホームズ先生は、幾つかの日本の学校を回られて、教師たちが比較的自由に教室で教え、教科書に拘っていないと考えたという。先生の意見では、法的拘束力をもつという学習指導要領は、緩やかな規制に過ぎないという。それに対して、イギリスの地方議会の持つ学校へ対する拘束力の方が大きいというのであった。教育年報の編集を通じて、各国各民族の教育水準を見つけてきた先生には、日本の学力水準は高いとその目に映じる。産業をはじめとする国際競争でイギリスは遅れをとっている。教育の質を到達水準で測る必要がある。教師のモノポリーはクリティサイズされてもやむを得ない。ホームズ先生には、例えば日本の研究者の間では有名になっていた“パートナーシップ”についても、“それは神話だ”という評価があって、そのような評価を下す背景には、教員養

成機構（Institute of Education）で永らく行政当局・教員組合・教会と係わりを持った際の経験が横たわっていた。

実地から見えてくるもの、それがホームズ先生にとっては考えるための、考え始める場合の初期条件なのである。先生にとって、法的な措置は、そうして見えてきたものに関する問題解決のための政策的初期条件になるはずのものであった。日本の方々も、教育の実地に足を下ろして考えている方々であった。幾分の食い違いのようなものを感じながら、話し合うホームズ先生と参加者との間を繋ぎつつ、同時にその様子を見るときも見ていた私には、ロンドン大学の演習風景が蘇ってきた。それはいつもの調子で、一人の発言者の、ロジックスの立て方と方向性に対して相当程度対立的なものを供し、そのうえで思考の展開を促すという、あの遣り方である。親切な説明者であるよりは、親切な挑戦者なのである。そのことに気づいた私は、話を繋ぐ役割を負った自らの力量の足りなさを改めて痛感せざるをえなかった。

三

学会にするか緩やかな同学の志の集りとするか。日英教育研究フォーラムを作り上げる過程で集うた人々の考えは分かれていた。イギリス教育学というものがあるのかどうか、私も考えあぐねた。旧イギリス教育研究会からフォーラムになるまで、鈴木英一先生が陰に陽にお力を注いでくださったことは既にニュースレター等で幾度か記した通りである。そのような折々に、『学』を英国風に『studies』とイメージすることの積極的な意味は何かと思索していた。

British Studiesと呼ばれる学問の領域があり、日本国内では、制度的には東京大学教養学部はそのコースが設けられ、貴重な成果が学問のうえでも人材を育てるうえでも積み重ねられてきた。イギリス本国にも、ウォリック大学を中心にする一連の試みがある。丁寧に詮索すると、きっと内外に沢山、同様の知的センターがあることであろう。果たしてそこではどのようなことが行われているのだろうか。

広い分野に跨ってイギリスの社会・文化・学術・芸術・スポーツが学ばれる。或いは研究される。そこには、自ずと学び方と研究の仕方に系譜のような流れや傾向が見えるのではなかろうか。そうのように考えると、多分、『イギリスの教育』について学び、研究し、教えておられる日本の方々についても、それぞれの仕事の系譜学的な見取り図が描けるのではないかと思う。私自身がロンドン大学へ赴いた経緯とその後のホームズ先生との関わりを記したが、フォーラムに属する方々の多くが、個別的動機と個別的な選択を経て、“「イギリス教育」のある分野”で“ある「イギリスの研究者の系譜」”に繋がって、今日まで研究に勤しみ、教育に励んでこられたのではないかと想像する。当面、それらの系譜はイギリスの教育哲学であったり、イギリスの教育社会学であったり、イギリスの教育心理学であったり、イギリスの教育史であったり、イギリスの障害学であったり、イギリスの幼児教育であったり、イギリスの体育であったり、或いはイギリスの教育行政学であったりという具合に、既存の教育学の分野や領域に対応しているであろう。

けれども、フォーラム成立以降のプログラムをみると、そこでは例えば教育の歴史を専門とする

方々が発言し、或いは哲学を専門とする方々の記録が残されているが、それらは広く歴史と歴史学に関する問題群を指摘する発言になり、また、哲学の課題と方法を語るものになっている。発言された方々は、イギリスにおける歴史学の動向とその課題について、哲学の問題と研究動向について、“ある系譜”に属して学びつつ、同時にそれらの系譜を相対化する試みをなさったというべきであろうし、また、その営みが続いていると理解すべきではなかろうか。同様のことは、イギリスの教育に関するほとんど総ての領域と分野についてもいいうることであるように思う。

今年度（2001年度）の研究テーマなどは、私などには、イギリスの教育と呼ばれるリアリティーについて成立するすべての学術的な試みが、従来の系譜学的な範疇を超えて新しいカテゴリーへ向けて再編成される過程を私たちに例示するものであるように思えてしかたがない。

イギリスは“統合されるヨーロッパ”に係わりつつどのように自らの自画像を描こうとするのだろうか。British Studies 或いはBritish Cultural Studiesは、自画像を描く仕事とどう係わる営みなのであろうか。デッサンなのか仕上げなのか。いずれにしてもそれは方法の多様さと柔らかさを要求するに違いない。この領域の研究に携わる程の人は、その要求に適わなければならない。例示した、ホームズ先生と日本側の人々との間に生まれた違和感のようなものは、それぞれの文化と歴史の自画像の描き方の違いに関連するところがある。イギリスの自画像の描き方が柔らかさと多様さを求めるとするなら、それを観る者、聴く者についても、それぞれの方法の多様さと柔らかさが求められ、その上に、自らが属する文化と歴史について描く自らの自画像が改めて問い直されることになろう。

日英教育研究フォーラムの次の十年は、それらの問いと求めとにどう対応するだろうか。私は期して待ちたい。